

ネパールの仏塔信仰について

氏 家 昭 夫

(高野山大学)

ネパールは小国ながら人種構成は複雑であり、それにとまって、宗教もヒンズー教・仏教・ラマ教というように、多様化の現象を呈している。今回はとくに、首都カトマンズの周辺に多く住むネワール人(Newari)の信仰形態について、仏塔を中心に考察してみたい。

一

ネワール人は、チベット・ビルマ語系(Tibet-Burman)のネワールリ(Newari)を話す民族で、古くからその人口の大半がカトマンズ盆地に住み、仏教文化を維持してきた。ネワール人の起源については、有史以前からの定住説とか北方系の移住民であるとか、学説がまちまちであるが⁽¹⁾、土着のネワール人は、リッチャビ(Jicchavi)王朝の時代(五世紀)から、支配者よりもより高度の文化を持っていたと推定されている⁽²⁾。

ネパールの歴史(王朝史)が確実に定められるリッチャビ時代(四〇〇〜七五〇)⁽³⁾から、ネワール人によって大乘仏教

が信奉されていたかどうかは、にわかに断定できない。しかし、七～八世紀ころからネパールに仏教徒(密教系)が存在したことは、チベットの歴史書(4)や「西域記」の記述によってある程度たしかめられる。「西域記」の中で、玄奘はネパール(尼波羅国)では、二千余人の僧がいて大小二乗を合せ研究している(兼攻綜習)とのべ、仏教の僧院(伽藍)とヒンズー教寺院(天祠)とが、隣接して建てられていると報告している(5)。

ネパールの仏教僧・ヴァジラーチャールヤ(Vajracārya)が、写経等の活動を展開するのは、中世のマルラ(Malla)王朝(十世紀)以後である(6)。「ターラナータ仏教史」によると、イスラム教の侵略によって、ヴィクラマシラー寺(Vikramasīla)の阿闍梨ラトナラクシタ(Katnarakṣita)やその他の僧たちが、多数ネパールやカシミールへ逃亡したと記されている(7)。地理上の関係からみても、ネパール(カトマンズ盆地)とビハール州とは接近していることから、両者の間では仏教徒の交流が頻繁に行われたこと(8)、したがってイスラム教の侵略以後、多くの仏教僧が經典とともにネパールへ逃れてきたであろうことは想像にたたくない。このようにして、十世紀以降、ネパール(9)に金剛乗系の大乗仏教が栄えるようになったものと思われる。

(1) Dor Bahadur Bista, *People of Nepal*, Kathmandu 1967, p. 17.

(2) D. R. Regmi, *Ancient Nepal*, Calcutta 1969, p. 25.

(3) Waldschmidt, *Nepal*, p. 17. L. Petech, *Medieval History of Nepal*, Roma 1958, p. 1.

(4) チベットの仏教史上、七世紀の初頭に在位したソンツェンガムボ王に、シナとネパールより二人の王妃が降嫁し、各王妃がチベットに仏教を導入したと伝える話は有名である。プトンの仏教史によれば、このときネパールの王女(khri btsun)は阿閼・弥勒・多羅の各尊像をもたらしたという。(Cf. *History of Buddhism by Bu-ston*, tr. by Obermiller II, p. 184) 「フ

シエ」によると、チソンデツェン王（在位七五四～九七）の時代にネパールに住む寂護（Śāntarakṣita）が二度チベットに招聘されたが、その時使者は寂護がそこで悪呪や魔法を使っていないかどうかを調べたという。Une chronique ancien de Sāmyas : Ba-bzed, par R. A. Stein, Paris 1961, p. 12, 16. これらの記述により、寂護の時代に密教系の大乗仏教がネパールに浸透していたことが充分考えられる。

(5) 「大唐西域記」大正五十一（No. 2087）九一〇中。しかし玄奘はネパールにきておらず、弗栗持国（vrijiis）の首都まで来てそこで人から聞いたことを記述したといわれる。Samuel Beal, *Buddhist Records of the Western World*, II p. 81.

(6) ネパールの写本の中でもっとも古い年代のものは「ネパール年一一九の奥書をもつ八千頌般若経（Aṣṭasāhasrika-Prajñā-pāramitā）」である。右年次は西暦九九八年（十一月六日）に比定される。L. Petech, *Medieval History of Nepal*, p. 33.

(7) A. Schiefner, *TĀRANĀTHAE* p. 192. 寺本婉稚「ターラナータ印度仏教史」三四〇ページ。このラトナラクシタに三二六年頃ネパールを訪れたダルマスヴァーミンが会い、師の礼をとっている。Biography of Dharmasvāmin, by Dr. G. Roerich, Moscow p. 6, 54.

(8) たとえば「ターラナータ仏教史」に、ネパール僧ブッダシュネリー（Buddhasnī）がヴィクラマシラー寺で大衆部の上座をつとめ、再びネパールに行つて真言を多説し、行法をよく修したとある。A. Schiefner, *ibid.* p. 192.

(9) 古来文献にあらわれるネパールとは、たんにカトマンズ盆地を指す。この習慣は現在までつづいている。

二

仏教僧・ヴァジラーチャールヤは、インドの階級制度でいえば、いわばバラモン僧の階級に相当する。ネパールのカースト名でいえば、グバジュ（Gubaju）とバレ（Bare）の出自をもつものがこれに当る。僧侶となるためには、七才以上の年齢になれば誰でも、出家誓戒（Pravrajavrata）を受けることができる。これをすませて灌頂（Vajracāryābhiṣeka）を受けた者は、すべてヴァジラーチャールヤ（Vajracārya 金剛阿闍梨）となることができる。か

れらは結婚して家族と共に自分の家に住み、必要に応じて寺院や聖地に出かけて行って祭事や行事を指導する。行法の仕方は、マンダラ (maṇḍala) を描き、本尊を観想し、ヴァジラ (vajra 金剛) やガンター (ghaṇṭā 鈴) を鳴らし、マントラ (mantra 真言) を唱える⁽²⁾。大祭の時は、ホーマ (homa 護摩) を焚いて祈願する。このような専門僧は、現在では減少の一途をたどっているが、なお僧侶有資格者はカトマンズ市とバタン市だけでも五千人は下らないといわれる⁽³⁾。

(1) 出家誓戒の儀式は剃髮式 (cūḍākaraṇa)。誓戒 (Vratā-deśa)。還(在)家式 (Samaṁvartā) が行われる。規則ではこれらを終るのに四年かかるが、現在では四日間で済ませる。誓戒はいわゆる沙弥・沙弥尼の十戒で、還家式ではこれを止めて、ウパ・サカの五戒だけでよいとされる。これによってネパールの仏教僧は在家仏教者であることがわかる。なお出家誓戒に関しては、B. H. Hodgson, *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet*, pp. 139 ~ 145, S. Lévi, *Le Népal* vol. II, pp. 30 ~ 31, Nalinaksa Datt, *Buddhism in Nepal*, *Bulletin of Tibetology* vol. III, No. 2 pp. 34 ~ 36, 氏家昭夫「ネパールの仏教儀礼」高野山大学仏教学科・国史学科「仏教学会報」第四・五号合併号一八一~二二頁等を参照。

(2) これらの行法は所作経疏に属する *Kriyā-saṁgraha*, *Kriyā-saṁuccaya*, *Ādikarmapradīpa* (山田竜城「梵語仏典の諸文献」一六二頁参照) などにもとづく。このうち *Ādikarmapradīpa* はブサン教授の研究がある。La Valée Poussin *Buddhism ; Etudes et Matériaux* pp. 162 ~ 252.

(3) ネパールの総人口は約四十万人でそのうち四五パーセントがカトマンズ盆地に住む。Cf. D. B. Bista, *ibid.*, p. 17. このうち正確な数は分らないが、約三分の一のネパール人が仏教徒であると自認している。ただし僧や寺院の数はカトマンズよりも旧市バタンの方が多い。シルヴァンレヴィ・松井知時訳「尼波羅國の仏教」仏教研究第四卷第二号二六頁参照。

仏教徒の信仰の対象はまらまちで、釈迦仏や金剛界の五仏の他、観自在・文殊・多羅菩薩などがよく親しまれている。信仰形態としてとくに注目すべきものは、仏塔信仰であるといえる。街中や寺院の内に建てられている二~三メー

トルの小塔から、カトマンズ市の東の郊外にある高さ数十メートルもある、ボドナート (Bodhnāth) のストウーパに至るまで、さまざまな形の仏塔が数多く建てられている⁽¹⁾。すべてに共通していることは、各塔の中央部の四方に金剛界の四仏をまつる龕があり、そこに阿闍(東)・阿弥陀(西)・宝生(南)・不空成就仏(北)がまつられていることである⁽²⁾(小塔には四仏が塔自身に彫刻される)。

ネパールで古くから文献や碑文に現れる塔は、カトマンズ市西部の岡の上にあるスヴァヤンブーチャイトヤ (Svayambhū-caitya) であり、これがネパールに住む各仏教徒のもっとも重要な仏塔の一つとなっている。塔の規模はボドナートのものよりやや小さいが、基壇の上の覆鉢の部分に四仏を入れる龕を設けているのは他と同様である⁽³⁾。異なる点は、この塔が通称スヴァヤンブーナート (Svayambhū-nāth) と呼ばれ、本初仏 (Ādibuddha) の象徴であると信じられている⁽⁴⁾。

この塔の起源について、現在報告されている碑文では一三七二年 (NS. 四九二) の修復の記録がもっとも古いものである⁽⁵⁾。しかしそれより一世紀前の一二二六年頃にネパールを訪れたダルマスヴァーミン (Dharmasvāmin) がネパールの観自在の信仰と共にこのスヴァヤンブーチャイトヤ (phags-pa shin-kun) についてのべている⁽⁶⁾。しかもこれはこの塔はチベットでは非常によく知られていると言っているから、おそらくとも十二世紀の後半には建立されていたと思われる。

(1) ネパールで仏塔は、チャイトヤ (caitya) と呼ばれたり、ストウーパ (stūpa) とされたり一定しない。碑文や文献でも同様である。山間部のラマ教圏では塔をチベット語でチオルテン (mchod-rten) と呼称する。例外的なものとして、バタン市に五ヶ所アショーカ王が建てたといわれるアショーカ・ストウーパ (Asoka-stūpa) といわれるものがある。しかしこれはいわゆ

る伝説に過ぎない。S. Lévi, *ibid.*, vol. II, p. 1. 最近では小乗仏教徒によるバゴダも建てられている。ボドナードの塔の規模や形態については、シルヴァンレヴィー前掲論文十五頁の略図参照。

(2) この四仏にビルシヤナ仏 (*vaṛcana*) を加えると金剛界の五仏となるが、通常このビルシヤナ仏は塔内部の神格とみて表面にはあらわされない。この場合、塔自身が本初仏としての大ビルシヤナ如来をあらわすと考えられる。しかし中には塔の東南隅にこのビルシヤナ仏を安置することがある。松長有慶「密教の相承者」八三ページ。

(3) この塔の形態については、シルヴァンレヴィー前掲論大十一、十二、四二頁参照。

(4) スヴァヤンブー・チャイトヤが本初仏の塔であることは、ホジソン以来内外の多くの学者によって指適されている。例えば B. H. Hodgson, *ibid.*, p. 42. S. Lévi, *ibid.*, vol. II p. 4. B. Bhattacharya, *ibid.*, p. 43. 梶尾祥雲「理趣経の研究」四六一ページ以下など。

(5) D. R. Regmi, *Medieval Nepal*, Part III, p. 21.

(6) G. Roerich, *ibid.*, p. 6, 54.

三

断片的な資料の記述とは別に、この塔の由来や信仰を記述するスヴァヤンブープラーナ (*Svayambhū-purāṇa* 以下 *S* プラーナと略称する) と呼ばれる文献が存在する(1)。ヒンズー教の聖地崇拜を語る他のプラーナやマハートミヤ (*mahātmya*) 文献と同じく、スヴァヤンブーチャイトヤ (*Svayambhū-caitya*, 以下のチャイトヤと略称する) を礼賛する作品である(2)。各時代を通じて広く読まれてきたもので、数多くの写本が残されている。それらを大別すると略本 (*laghu*) と広本 (*vyāh*) の二種に分れる(3)。両者とも内容はほとんど同じで、広本になるほど同一内容の繰り返しが多くなる傾向がみられる。

物語は伝統的なプラーナの形式を受けついで、三組六者の会話 (*satsamvāda*) で展開されていく。まず第一章の物

語は、ガヤー (Gaya) におけるジャシュリー (Jayasāi) とジナシュリー (Jinasrī) 二菩薩との会話から始まる(4)。ジナシュリー菩薩は、菩提戒 (bodhisamvara) を行ずるには、最初にいかなる誓戒 (vrata) を行えばよいかを質問する。これにたいしてジャシュリー菩薩は菩提戒を行ずるには、まず上師 (sadguru) に帰依し親近すべきである。そしてその教えを受けて儀軌 (vidhi) にしたがって専心に聖所 (tirtha) で沐浴し、身体を清めて三宝に帰依する。菩提に心を集中し (sambodhinīṭṣayaḥ)、布施戒 (posadhavrata) をえて、世のために行すべきである。そうすることによって、人は菩提をえて尊敬さるべき如来 (sugata) となり、涅槃をえることができる。

ところでそのような誓戒を行うのにもっとも適した地はどこであるかといえ、それはすべての仏国土 (buddhakṣetra) のうちで、諸仏が涅槃したまえるチャイトヤの中に (buddhanāṇṇīrvaṛṭāṇṇī caityesu)、誓戒の最適の場所がある。その中でもスヴァヤンブーチャイトヤ (svayambhū-caitya) が最高であるとされる。それでは仏の住処 (jinalaya) であるスヴァヤンブー (svayambhū-caitya のこと) がいかにして生じたのか。それを説明するためにジャヤシュリー菩薩は、その昔パータリプトラ (pāṭaliputra) にいたアショーカ王 (Asoka) も師のウパグプタ (Upagupta) に同様の質問をした、とのべる。以下はウパグプタがアショーカ王に語った内容である。

かつて釈迦牟尼仏 (Sakyamuni) が僧伽と共にネパールにきて、聖S・チャイトヤの近くの仏処 (sugatāśrama) に住んだ。そのとき仏は弥勒 (maiteya) に仏の住処である法界 (dharmadhātu-jinalaya) が生起した物語をつぎのように語った。

その昔バドゥラカルバ (bhadrakalpa 賢劫時) に毘婆尸仏 (Vipśyin) が在世した時、私はサトヤダルマ (Satya-dharma) という菩薩であった。そのときネパールに七クローシャ (sapta-krośa 約十六マイル四方) の広さをもつ湖

があり、四方山に囲まれて八種の徳（*astāṅga-guṇa*）を具えていた。そこで沐浴等を行い、三宝に帰依し、菩提行戒（*bodhicārya-vrata*）をえて世のために行ずる者は、たちまちに無垢の自体（*vimalātman*）をえ、善吉祥の功德を具える（*bhadrāśrī-sadgūṇānvita*）菩薩となる。そしてまさしくそこに、仏の住処である法界（*dharmadhātu*）がのちに生じるであろう。すべての人々がこれを見て淨信をもつて帰依することによって、功德が生じ、それによって人々は感官を清め（*subhendriya*）善吉祥の樂をえる、云々と説明されている。以上で第一章を終る（5）。

このような説明をみると、Sチャイトヤといわれるものが、第一に靈場信仰の場として考えられていることが理解できる。これには他のマハートミヤ（*mahātmya*）文献にあらわれるインド教の聖地崇拜の影響がみとめられる（6）。スヴァヤンブープラーナ（*Svayambhū-purāṇa*）には、他の場所でも聖地崇拜に関する記述がよく出てくる。第四章ではバグマティ川（*Bāgmati*）での沐浴・誓戒の功德をのべ、そこで顔を洗うだけで、ガンジス河における沐浴と同じ効果がえられるとされる（7）。第五章では、弥勒菩薩が世尊にたいして、聖地で沐浴する等の功德（*pūṇya-phala*）は何かと尋ねている。それにたいして世尊は、聖地で沐浴することによって、清淨（*visuddha*）、煩惱の排除（*nikklesa*）、感官の制御（*viññendriya*）、三種の菩提（*trividhā-bodhi*）、仏覺の位（*saṃbuddha-pada*）をえる等（8）と答えている。

第二にSチャイトヤが「諸仏の涅槃せる塔」または「法界」とされている点から考えると、この塔は、法華經などに説かれる「仏舍利」（9）の塔というよりもむしろ「法身仏舍利」（10）の塔とみなされていることが分る。Sチャイトヤが本初仏の象徴であるとされるのはこのためであると思われる（11）。

(1) 「svayambhū-purāṇa」の成立について R. Mitra 氏の作品を十世紀の Mañjuśrī (?) に帰すが、どの写本にも著者を Mañjuśrī と記すものがなく、この説の根拠は不明である。Cf. R. Mitra, The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal p. 245 現在までに S・プラーナの十五世紀以前の写本が存在せず、広本(Vrhat)の第八章の最後に未来のネパールの状態にふれ、そして Yaksamalla 王(1428~1480)の名を記述するところから、S・プラーナの成立は十五世紀とされている。Cf. S. Lévi, *ibid.*, vol. I, p. 210. しかし広本の右の記述は明らかに付加的なものであり、略本にはこれを欠いているから、S・プラーナの原型はより以前に成立していたことが考えられる。Cf. R. Regmi, *Medieval Nepal*, Part. I, p. 568.

(2) 本論で依用するテキストは以下の三種である。

A Vrhat Svayambhū-purāṇa, chap. 8 (校訂本、偈数約五千 by H. Sāstri, *Bibliotheca Indica* 133)

B Svayambhū-purāṇa, chap. 10 (將來本、偈数約二千、ネパール国立古文書図書館蔵本 = NNA 本 No. ca651-vi210, 東大写本 No. 499、同一致である。目録「Vrhatcupatram」仏教部三、一三四頁参照)

C Svayambhū-purāṇa, chap. 12 (NNA 本、偈数約四千、目録 No. 4-1365, vi 333, 同一致である。S. Lévi, *Le Népal* I, p. 208 以下参照。Bibliothèque National, mss. Sanscrits D. 78、同一致である)

(2) 章題 Cf. S. Matsunami, *The Sanskrit Manuscripts*, p. 240.)

chap. I Śrīsvayambhūdharmadhātu-samutpatti-nidhānakathā prathamō 'dhyāyaḥ (AI)

chap. II Śrīsvayambhūcaityabhaṭṭālakoddeśe pūṇphalavarṇaṇo nāma dvitīyo 'dhyāyaḥ (AII)

chap. III Śrīsvayambhūtpatti-samuddeśa-mahānradāśoṇa-dharmadhātu-padmagiri-praiṣṭhāpano nāma tritīyo 'dhyāyaḥ (AIII)

chap. IV Śrīsvayambhūcaitya-samutpatikathā vitarāgādītīrharāṣṭra-pravartamāno nāma caturtho 'dhyāyaḥ (AIV)

chap. V Śrīsvayambhūtpattyaneka-tīrhasamjātamahātmavavṛṇaṇo nāma pañcamo 'dhyāyaḥ (AV)

chap. VI Śrīsvayambhūdharmadhātu-vagīśvarābhīḍhāna-prasiddha-pravartano nāma ṣaṣṭho 'dhyāyaḥ (AVI)

chap. VII Śrīsvayambhūdharmadhātu-vagīśvaro guptikṛita-pravartano nāma sapṭamo 'dhyāyaḥ (AVII)

chap. VIII Svayambhūcaityāśraye nāgasādhana-suvṛiṣṭikarapo nāma aṣṭamo 'dhyāyaḥ (AVIII)

ネパールの仏教信仰について (氏家昭夫)

chap. IX Śrīmanmahācārya-śāntīkaragaṇasamśiddhi-mahātmayānubhāvaprakathana-pravṛitto nāma navamo 'dhyāyaḥ (AⅧ)

chap X Śrīdharmadhātusvayambhūtpati-dharmamahātmayasubhāṣita-daśamo 'dhyāyaḥ (AⅧ)

(4) 第一章では最初にジャヤシュリーとジナシュリーの二菩薩が登場し、つぎにウバグプタとアショーカ王、つづいて仏陀と弥勒菩薩が登場する。仏陀の回顧は過去仏の時代にさかのぼる。第一章は毘婆尸仏 (vipaśyīn) 第二章は尸棄仏 (śikhiṇ) 第三章は毘舍浮仏 (viśvabhū) 第四章は拘留孫仏 (krakucchanda) 第六章は拘那含牟尼 (kanakamunī) 第七章は迦葉仏 (kāśyapa) の各時代の物語である。Cf. S. Lévi, *ibid.*, I, p. 213.

(5) A 本一〜四四頁。

(6) 中野義照「叙事詩とプラナーナ」二三四頁。

(7) (8) B 本(東大 No. 499) fol. 31 b-2, 38 b-6〜39 b-3.

(9) 平川彰「初期大乘仏教の研究」五六九頁以下参照。

(10) 右同書五七五頁。

(11) たとえばC 本第一章にアショカ王が塔に近づいて五仏 (pañcabuddha) に供養して塔像 (caityabimba) を見たとあり、その塔とは五智身を有し (pañcajñānakīrtan) 五仏が住するダートウである (dhātun pañcabuddhādhiṣṭhānam) と云われる (fol. 8a-3〜6)。この場合「法界」を五仏または五仏を統括する本初仏の舍利 (dhātu) とも考えることができる。

四

しかしここで注意しておかなければならないことは、S プラナーナには、S チャイトヤを指して、「本初仏」であるとは明瞭に述べられていない。それではホジソン以来、S チャイトヤを本初仏であるとする根拠はどこにあるかというところが問題となるが、「スヴァヤンブー」が「本初仏」であるとの記述は、実は他の文献に存在する。

まず「グナカーランダヴェーハ」第三章には、「世界創造」説が展開されているが(1)、そこにはつぎのようにのべ

られている(2)。

すなわち本初に五大すらなきとき、大空に光焰の形 (iyoti-rūpa) をした汚れなき本初仏 (ādi-buddha) が生じた。三徳をそなえ、大身をもち、種々の相を有する者が生じた。

かの自生の大仏 (svayambhūmahabuddha) は本初の主、大自在なり。∴世界との結合と名づける三昧を自身で行した。

つぎに文殊菩薩の名義をあげる「ナーマサンギーティ」には、「スヴァヤンブー」とともに「本初仏」が文殊菩薩の一名讃句として用いられている。

「一実堅固なる金剛を自体とし、即時に世界の主は生ず。

虚空より生じ、自生せる者 (svayambhū), 大慧智の火(眼)を有す(3)。」

「無始無終なる仏は、比類なき本初仏 (ādi-buddha) なり。智慧の一眼は無垢にして、如来は智慧身を有す(4)。」

右の二文献の記述をもとにして考えると、「スヴァヤンブー」即「本初仏」であるという理解がともかく成立すると思われる。右の二經典は、いずれもネパールでは、仏教徒の間で長く親しまれてきたものである。S プラーナの作者が、これらの經典を念頭において物語を作成したであろうことは、充分考えられる。

S プラーナの第二章は、弥勒菩薩が世尊にスヴァヤンブーの生起の物語 (svayambhūpatī-saṅgāthā) を請うところから始まる。その中につぎのようなS チャイトヤの描写がある(5)。

そのとき(尸棄仏の時代)かの福德の水をたたえる池に、輝やく金剛石の最高の花蕊 (keśara) でできた宝の蓮華の茎 (mañi-nāla) に、千葉の大蓮華が生じた。その宝の蓮華の花の中央 (karṇika) に、仏の住処である法界が自身

anādi-nidhano buddha ādi-buddho niranvayaḥ /
jānaika-cakṣur amalo jñāna-mūrtis tathāgataḥ // 100 //

(5) B 本 fol. 11 a~5.

(6) 「ナーマサンギータ」第五十四偈(前掲書三三頁)に‘pañcajātmaḥ’等の表現がみられる。おそらくナーマサンギータのこの言葉にもとづいて、ホジソンが本初仏の五仏創造説を立て(B・H ホジソン前掲書二七頁)、さらにそれを受けついで、梶尾博士が本初仏が普賢金剛薩埵にはかならないこと、この普賢金剛の性海から阿閼等の四仏および種々様々の色身が示現すると論じた。梶尾祥雲「理趣經の研究」四八〇頁以下。

五

S プラーナとナーマサンギータとの関係と並行して今一つ看過しえないのは、S チャイトヤと文殊師利菩薩との関係である。S プラーナには文殊菩薩にたいする帰依信仰が随所に説かれている。第三章をみると、北方のシナ(mahacina)に住む文殊菩薩が三昧によって水中に生じたS 法界を知り、近づいて四方の山を剣で切り開いて湖水を放出したという物語が語られている。文殊菩薩は湖水が引いたあとに山をつくって法界を安置し、自分もその近くに僧伽(sangha)と共に住した。それ以来すべての神々や人間が文殊菩薩に帰依親近したという。

さらに第六章には、S 法界が文殊師利の異名である「ヴァーギーシュバラ(vāgīśvara)」と名づけられる理由が語られている。その内容は、拘那含牟尼(Kanakamuni)仏の時代に、パータリプトラにダルマシュリー(Dharmaśrī)という僧がいて、大衆にナーマサンギータを説くことを欲した。しかしかれは、その中の十二文字(2)の秘密の意味(dvādaśakṣara-guhyārtha)を正しく知らなかったので、幾度も世界を見渡す観想をして、ついに文殊がシナ

(mahācīna) の山中に在ることを知る。それから彼は文殊を求めて旅をつづけ、途中で農夫の姿をした文殊菩薩に出会う（その場所は第三章からSチャイトヤの近くであることが分る）。ダルマシュリーミトラの帰依を受けた文殊は、法界マンドラ (dharmadhātu-maṇḍala) をつくり、そこでかれに灌頂 (abhiśekhā) を授ける。そして十二字の秘密義を教える。こうして文殊菩薩がダルマシュリーミトラに灌頂を与えて以来、S法界（チャイトヤ）がヴァーギーシュバラ (vāgīśvara) と名づけられるようになったとされる。

右のSチャイトヤと文殊菩薩との結びつきは後者が前者に従属する関係であるが、ナーマサンギーティには、文殊の智身は自生 (svayambhū) であるともされている⁽³⁾。またナーマサンギーティの成就法の中には、「文殊師利智慧菩薩本初仏と名づくる成就法」(jñānasattva-mañjuśrīadibuddha-nāma-sādhana) といわれるものが存在する⁽⁴⁾。このことから、Sチャイトヤが、スヴァヤンブーという名を冠するがゆえに本初仏とされるならば、その本初仏は実は文殊師利菩薩であるともいえるわけである。また、先述の水中の蓮華に生じたとされるSチャイトヤが經典や寺院の壁に描写される場合には、一茎三枝の蓮華の上に描かれるのであるが、「文殊師利根本儀軌」にある文殊を中尊とするマンドラが、同じように一茎三枝の蓮華上に設定されている⁽⁵⁾。これもたんなる絵画上の表現ではあるが、Sチャイトヤと文殊菩薩との関係を暗示する⁽⁶⁾。

以上の如くSチャイトヤは、「スヴァヤンブー」という語をとおして本初仏の象徴となり、さらには文殊信仰へと結びつく。しかしSブラーナによるかぎり、Sチャイトヤは、たんに仏の住所または法界としての塔であって、特定の仏格を象徴するものではない。文殊菩薩と塔との関係も、塔そのものが直接文殊菩薩と結びつくものではない。むしろ文殊菩薩は塔を賛美し顕彰する賛仰者的な存在である。このことはSブラーナにおけるS法界にたいする崇拜と

その功德を見ても明らかである。S プラナ第二章には、チャイトヤを供養して生ずる功德が種々述べられているが、そこには塔を特定の仏格として崇拜供養するという情景は見られない。たとえばある者が、「高い天蓋 (ucca-vitāna) を吊して心から塔を崇拜すれば」、「その徳によってすぐれた子孫 (śraddhavamśa)」をえる。また「如来の住処 (sugatāvāsa) に種々の旗 (dhvaja)」や「黄金の宝花で(飾られた)傘蓋 (chatra)」や太鼓などの楽器を奏して歌う者は (vividhairvādyaiḥ saṃgiti-murajābhiḥ)、「地上の王、天上のインドラとなり、死後仏処に趣く」。

あるいは「正法を成就 (saddharma-sādhana) して、如来の住処 (sugatālaya) に往く。」また菩薩が「マントラ (mantra) や陀羅尼 (dharaṇī)」を唱えて法界も思念すれば、「善吉祥の徳 (bhadrāśrī-saḍguṇa) をえて、菩提を行ずる者となる (bhaveyur bodhicīrinah)」等々。このような記述を見ると、S チャイトヤは在家の人々や菩薩にとって幸福の追求と、菩提をえるための崇拜の対象として存在したことがわかる。

(1) ここでは、文殊が住している山(文殊山)は、古来バンチャシルシャ (pañca-śīśa) として有名であるとされる(A本、一四七頁)。レヴィ教授が指摘しているように、このバンチャシルシャは山西省の五台山を指すものであろう。(S. Levi, *ibid.* p. 335)興味深いことには、山内大塔院寺に建てられている仏舍利塔の規模や形態が、よく現在のスヴァンブーナートの塔と類似している。望月仏教大辞典2、一二四頁、同付図四六六参照。

(2) 十二字とは a a i u ē ai o au am ah の種子マントラのことである。蜜波羅圭之介「ナーマサンギーティにおける伝達について」日本仏教学会年報第三十六号一二五頁。S. Lévi, *Le Népal I*, p. 334.

(3) mañjuśrī-jñāna-sattvasya jñāna-mūrtah svayambhuvah / Nāma-saṅgīti, *ibid.* p. 7.

(4) 東北 No. 2604. 酒井真典「本初仏 (Ādibuddha) について」千潟博士古稀記念論文集四七九頁。

(5) 「又此所坐白蓮從池水生。於一莖幹有三枝蓮花。中枝蓮華坐妙吉祥。阿辺白蓮華右坐普賢左坐觀自在。其蓮華莖作大綠宝

色」大正二〇、No. 1191：八六四頁上。T. Ganapatiśāstri, *Āryamañjuśrīmūlakalpa*, Part. I, p. 76. 堀内寛仁「文殊儀軌經の梗概(一)」密教文化第八号四九頁。なおのチャイトヤに関するチベット側の資料に T. Wylie, *A Tibetan Religious Geography of Nepal* (Serie Oriental Roma XLII) の Appendix B に出す 'Bal-yul mecho-dren 'Phags-pa shin-kun dan dei gnas gzan-rnams kyi dkar-chag' がある。これはのチャイトヤの因縁 (rgyu-ikyen) と周辺の地理をのべる小文献であるが、その中で塔の伝説を裏づける経典として「聖牛角授記と名づける大乘經」(東北三七番)と右の「文殊師利根本儀軌經」をあげている。

(6) この他に間接的な資料として、西晋聶道真訳の「仏説文殊師利般涅槃經」(大正十四、No. 463) がある。この經の冒頭に文殊が仏滅のあと四五〇年に出家・滅度して涅槃に入り、舍利を分けて衆生を饒益し、雪山に至って五百の仙人に十二部經を説いた、と記されている。S. Levi, *ibid.*, p. 341. 平川彰「大乘仏教の興起と文殊菩薩」印仏研十八の二、一四八頁参照。

(7) A 本二二三頁以下。

おわりに

S プラーナ第七章には、S チャイトヤが現在の形をとるにいたった経過がつぎのように語られている。

その昔(迦葉仏の時代)、ガウダ(Gauda)の国王プラチャンダデーバ(Prachanda-deva)は王位を捨ててネパールにきて出家し、シャーンタシュリー比丘(Santaśrī-bhikṣu)と呼ばれた。ある時比丘はの法界を見て、このままでは宝塔が破壊されてはいけけないのでチャイトヤを隠し覆して人々の害を受けないようにしようと考える。かれはそのことを師のグナーカラ(Gunākara)に話すと、もしS チャイトヤを覆い隠したいならば、独覺・声聞乗を止めて、大乘にしたがって金剛灌頂(vajrābhiṣeka)を受け、金剛(阿闍梨)の戒を行じなさい、と教える。そこでシャーンタシュリーは師の言葉にしたがって、「大乘にかなう金剛阿闍梨の誓戒(mahāyāna vajracārya-vrata)」をえた。そしてシャ

インタシュリー金剛阿闍梨となつて、光焰の形 (iyoti-rupa) をしたチャイトヤを岩石 (sila) でおおい、その上にブリック (sika) で高いチャイトヤを儀軌にしたがつて建て、供養した云々。

この物語で推察しうることは、現在の大塔は、もと光り輝やく小チャイトヤを保護するために、外来の仏教徒によつて後に建てられたものである。

もとの宝塔が密教の儀軌にしたがつて覆いかくされて大塔がつくられたとする伝説は、ネパールの仏教が、当初から密教的なものをのみ容認する社会的要請または風潮があつて生じたものかどうか、今は推測の域を出ない。ネパール仏教の発生や展開については、インド教との関係など不明な点が多く残されているので、今後さらに考察をふかめていきたい。

